研究紹介―プロジェクト・リーダーに聞く―

エチオピアにおける若者の就活

――職業訓練・教育と就労――

福西隆弘（地域研究センター）
聞き手：村山真弓（研究支援部）
荒神衣美（地域研究センター）

――「職業訓練・教育と就労」の研究プロジェクトを始めた動機をお聞かせください。

これは同僚の町北研究員と２人で実施しているプロジェクトで、職業教育が若者の就労に及ぼす影響をエチオピアに焦点を当てて精査するものです。アフリカでは、2000年代中ごろから、若者の雇用（失業）が問題となっていて、政府も社会不安に結びつくのではないかと危機感を強めています。この問題の対処策の１つとして、職業訓練が注目されています。以前は一般教育（中学校、高校、大学）を拡充して教育水準を上げれば生産性があがると考えられていましたが、それだけでは効果がでなかったため、職業に直結するようなスキルを身につけたほうが就職に結び付くと考えられるようになっています。

エチオピアは、職業訓練に先行的に投資してきた国です。2006年には職業訓練制度も大きく改革しました。単に学校を卒業したら良しとはせず、１年ごとにテストを課すことにしたのです。テストに合格したら、職業ごとの技術レベルを示す証明書（certificate）を授与することにしました。また、これらの基礎として、産業界と共同で卒業生が身につけるべきスキルについて明文化しています。

●職業訓練改革の効果は？

このプロジェクトの前段で実施したプロジェクトで、エチオピア政府が収集した大規模な労働者調査データを使って様々な角度から職業訓練の効果を検討してみました。すると、どうやらあまり良い結果が出ていないということが分かってきたんです。そこで、このプロジェクトでは、その理由の解明を研究課題としています。私たちがとくに注目しているのは、証明書の効果です。証明書は、企業が応募者の能力を正確に判断する材料となり、就活におけるマッチを助けると期待されています。首都のアジスアベバにあるテストセンターには、テスト結果のデータベースがありますので、そこに協力をお願いして、例えば同じテストに合格した人としなかった人とで就職に違いが出ているかどうかを見ようとい

求人情報に集まる若者（撮影：福西隆弘、アジスアベバ）

うのが、今やろうとしていることです。

――テストセンターのデータに加えて、独自データも集めるのですか。

はい。テストセンターが持っているのはテストの情報だけで、その後の就職については関知していないので、そこは私たちで追跡調査をします。

――エチオピアの職業訓練改革がアフリカのなかでも先行しているのはなぜでしょうか。

エチオピアは、産業政策および雇用政策の一環として職業訓練を位置付けています。アフリカでは珍しく、上がやると言ったら下までちゃんと伝わることも、比較的改革がはやく進んでいる要因の１つだと思います。

●エチオピアでの調査のコツ

――データ入手は大変ですか。

そうですね。誰でも使わせてもらえるデータではないので、行政機関との関係構築が大切になってきます。私たちは非常に優秀なアシスタントを得られたおかげで、うまくデータを入手できていると思います。

――いかに優秀なパートナーを見つけるかって重要ですよね。

そうですね。あと、彼がうまく立ち回るのを助ける工夫として、私は髭を生やして調査にいきます。エチオピアはシニアが敬われる社会で、白髪や髭があるとシニアとして見られやすい。アシスタントは私を「偉いヤツ」だと伝えなきゃならないのに、私がそう見えなかったり下手に腰が低かったりすると、かえって困るようです。

福西隆弘氏

――追跡調査のほうでは、何か工夫をされていますか。

インタビュー相手にはまず電話をするのですが、突然の電話で「話を聞きたいから来てくれ」と言われても、向こうは警戒すると思います。そこで、相手に安心してもらえるよう、インタビュー場所を職業訓練校に設定しました。あとは、彼らの考え方などを理解するうえで、日本とエチオピアの違いに加えて、自分とインタビュー相手との世代間ギャップの大きさについても、最近気にしています。20 代の若者と自分とではもう全然考え方が違うので。そこは実証分析用のデータ収集とは別途、若者にインタビューしたりもしていますね。街中に求職情報の掲示板があるので、それを見に来ている求職者をつかまえて話を聞かせてもらったりしています。

――現地事情や自分の属性なども考慮した工夫をいろいろされているんですね。興味深いお話をありがとうございました。

職業訓練校での授業（撮影：福西隆弘）

社会人向けの訓練プログラム（撮影：福西隆弘）